

数学の方法と哲学の方法

——『メノン』の問題——

田 島 孝

プラトンは『国家』篇第6巻の線分の比喩において哲学の方法、すなわち、デアレクティケーと数学の方法を対比させている。その最も基本的な差異は次の通りである。数学は前提を設定し、それから結論を無条件的に導出しようとする¹。これに対して、哲学は前提を立てて探求をするが、それから結論を導くのではなく、一度立てた前提を探求と吟味により覆し、そうした探求と吟味を積み重ねることにより、無前提の前提に到達する、とされる。そのように数学の方法と、哲学との方法が対比され、この差異故に、すなわち、前提を無条件に真と定めるといった基本性格故に、数学的知識が不完全なものとなされ、哲学が目指す端的な知識と対比されている。しかしながらプラトンは、このように哲学の方法を数学の方法と対比させて説明するけれども、それが現実の哲学的探求に於いてどのような差異を生み出すのかという点について特定の対話篇で明示的に論じている、とは考えられてはいない。しかし、哲学の根幹に関わるこれほどの重大な問題をプラトンが単にその基本性格を示唆するのみで具体的に論ずることがない、というのは不思議なことである。私は、『メノン』篇がこの問題を隠れた形で意図的に取り上げて論じる対話篇である、と考えている。小論でこのことを具体的に示したい。

1 すなわち、数学的知識というものは整合性が不可欠であることを示している。基本的には定義が「何であるか」を決定し、その本質が所有すべき属性がその時点で決定されるのである。その故に、プラトンの主張するソクラテスの誤謬とよく言われる「何であるか」が分からなければ「どのようにあるか」は不明であるというテーゼの最も典型的なモデルを形成する。

1 探求と予断

1.1 「ソクラテスよ，私に言うことができますか．徳は教えられたものか（*διδασκόν*），あるいは，教えられたものものではなく，習熟により得られたものか（*ἀσκητόν*），あるいは習熟によるのでもなく，学ぶことによるのでもなく，人間に生まれつき（*φύσει*）備わるものなのか，あるいは何か別の方法で備わるものなのか」（70a1-4）．

『メノン』の冒頭はこの言葉で始まる．プラトンの対話篇のいずれにおいてもその冒頭部分には然るべき役割が与えられており，一見すると本文の問題と直接的には無関係に見えながら，実は内的に不可分な関係にある．『メノン』はこうした体裁とは異なり，端的に主題そのものから始まっているかのような印象を読む人に与える．というのは，メノンのこの言葉をうけて，ゴルギアスのせいでアテネからテッサリアに知恵が移籍してしまった，という冗談を挟んで下記のような，「何であるか」を知らずに「どのようにあるか」を知ることができようか，と認識の秩序の問題に直ぐ移るからである．こうして『メノン』はプラトンには珍しく，よく知られた哲学的主題にそのまま直截に移行するかのような印象を与える．

しかしながら，冒頭のこの言葉は『メノン』の問題の所在を二重の意味でよく示している．それは，他の対話篇で本文とは無関係のように見える多くの対話篇の冒頭部分が分かちがたく本論と内的関係にあるように，このような形で冒頭部分が提示する哲学的問題が実は『メノン』では隠れた形で論じられる本論での問題と分かちがたく結ばれているのである²．隠れた問題とは数学の方法と哲学の方法との本質的な違いである．

1.2 このように始まる『メノン』の議論は，決定的に重要ないくつかのテーゼと，その意味を理解するための比喩としての具体例を提示することにより，主題そのものをさらに深める．『メノン』解釈の鍵はこの比喩をどのように解釈するかにかかっていると一言しても言い過ぎではない．本論では『メノン』篇でプラトンが語る主要な比喩の意味を解読することによっ

2 冒頭部の唐突なメノンの問いの意味に関しては，下記を参照．Jacob Klein, *A Commentary on Plato's Meno* (1965), p. 38.

て対話篇の全体像を明らかにしたい。鍵となる言葉と比喩をまず提示することにする。

最初のメノンの問いが対話篇全体の問題そのものの端緒となる。

MI 「徳は教えられたものか」。

この問いに対して、ソクラテスは直接回答することなく、ある一つの知の秩序を語る。

S1 「『何であるか』が知られないときに『どのようにあるか』を知ることにはできない」[徳が何であるかが不明であるので、徳がどのように人に備わるか不明である] (71b3-4)。

この説明として、S1の註とも言うべき例をあげる。

S1-1 「メノンが誰であるかを全く知らない人は、彼が見目がよいか、金持ちか、生まれがよいか、を知ることはできない」(71b4-8)。

この比喩は不思議な比喩である。その真意を掴みがたい³。ここでの「メノンを知る」というのはどういう意味であろうか。メノンの「どのようにあるか」に関して三点があげられている。見目、富、家柄である。これらは、もしメノンに関する一切の情報を欠く場合にはもちろん知り得ない事柄である。逆に何らかの情報を持っていれば直接面識がなくても、知りうる事柄でもある。したがって、必ずしも「見知り」による知を前提としている、というわけではない。およそ何らかの形で知っていれば、という意味と解される⁴。すると、ここでソクラテスのこの比喩導入の意図は何であろうか。そこには二つの意図があると考えられる。一つは、「何であるか」という知の「どのようにあるか」の知に対する優先性の主張、すなわち、知識には認識の秩序に於いてある構造があるというS1の再説である。もう一つは、メノンの最初の問い、「徳は教えられたものか」という問いそのものへの問い返しである。すなわち、そのような問いをメノンが問うと

3 R. S. Bluck (*Plato's Meno*, 1964, pp.213-4) はここでのメノンを知るという意味を「見知り acquaintance」と解釈している。クラインのコメントは *ibid.*, pp. 41-2。クラインはメノンに出会ったこともなく、聞いたこともないなら、この比喩は徳の場合の比喩としては有効ではない、としている。

4 我々は『テアイテトス』第二部の冒頭で虚偽判断の可能性を問うに当たって、「知っている、知らない」の二分法から議論が始まることを思い出すことが必要であろう。

きに、何らかの徳に対する、敢えて言えば、予断（proleptic な）がありはしないか、という示唆である。徳に対してメノンが何らかの観念を持つことなしには、こうした問いは生まれ得ないということを暗にソクラテスは示唆しているのである。そして、それは『メノン』篇自体の問いそのものに直結する。その予断の想起、すなわち、自覚的なその吟味が対話篇全体の問題と繋がるのである。したがって、徳の「何であるか」をソクラテス自身知らないことはもとより、知っている人に出会ったことがない、というソクラテスの言葉が嘘となるように、その何であるかをゴルギアスに代わってメノン自身語ってほしいとのソクラテスの言葉に対して (71d)、メノンは「難しいことではない」、「容易である」、「難しくはない」、「困難はない」と四度も語り、その知の所有を自ら承認するのである (71e-72a)。

こうした結果、メノンが語る徳とは「何であるか」という問いに対する回答は、最初は「男の徳は…、女の徳は…、子供の、年寄りの、自由人の、奴隷の徳がある。年齢、仕事に応じて徳は様々である。悪徳も同様である」(71e1 - 72a4) というものである。これに対してソクラテスは、一なる徳を求めて多に至ったと言ひ、蜂を例にして反論する。蜂は、女王蜂、雄蜂、働き蜂、幼虫などいても、蜂である限り同一ではないのか、と、蜂の比喩は、メノンが人の徳をその社会的な役割において捉えようとする事に対して、蜂の社会の機能による分化を例として、それにも拘わらず、そこに共通する種としての蜂の同一性を、探求している徳の同一性と類比的に説明するために導入されている⁵。これを受けて、メノンは二度目の定義をする。ソクラテスが全てを通じて一つ (ἐν γέ τις κατὰ πάντων, ἐν γέ τι εἶδος ταυτόν) (73cd1,72c7) を求めているなら「徳は人を支配する能力に他ならない」と言う。メノンは先の社会的機能による定義を修正し、男の徳で人の徳を代表させようとするのである。この回答は、奴隷の徳が人を支配するという事と両立し得ないということにより、退けられる。また、

5 ここで更に、「健康、大きさ、強さ」という例を挙げて、老若、男女に拘わらずこれらは同一ではないか、と同一性の要求が語られる。蜂が蜂である限りで同一とされるのと同様に人間が人間である限りで同一である、という視点がここで確認される。そして、メノンが最初に答えた男としての、あるいは女としての徳ではなく、人間としての共通の徳が求められる視点が提示されるのである。 Cf. Jacob Klein, *op.cit.*, p. 51.

男がポリスを、女が家を良く治める場合にも、正しく、賢慮を以てする場合に良く治められる。すなわち、同一のもの（正義と節制）を得ることにより、良くということが確保されることが承認される（73a-c）⁶。さらに、それが誰による場合にも「支配する能力」に「正しく」をつけ加えないだろうか（d6-8）と問われ、メノンは「正義は徳だから」（d9）とこれを容認する。これに対し、ソクラテスは、正義は端的に徳か、あるいは、徳の一つか、と聞く（73e1）。ここから議論は新たな局面に入る。

1.3 正義は端的に徳か、あるいは、徳の一つか、という問いを理解できないメノンにソクラテスは二つの具体例を提示して違いを説明する。その一つは形（σχήμα）と丸み（曲、στρογγυλότης）である。すなわち、「丸み」を「形」とは言わず、「一つの形（形の一つ）」と言うであろう。というものである。その理由はその他の形（直）もあるからである（73e）。もう一つは白（τό λευκόν）と色（χρῶμα）の例である。「白」を端的に「色」と言うだろうか、あるいは「一つの色（色の一つ）」と言うだろうか、という例である（74ab）。この二つの例は『メノン』の議論の中でも最も重要な具体例で、この具体例を中心にその後の議論全体が展開すると言っても過言ではない。ここで徳と正義、節制、勇気などの徳とその部分との関係という本来の主題が、形と形の部分および色と色の部分の関係と類比的に考察されることになる。ここまでが、この三組の類比関係の第一段階である。

本来の問いは「徳とは何であるか」である。この問いの意味を良く理解し得ないメノンに対して、形を具体例としてソクラテスはその問いに対する回答、すなわち、「何であるか」を答える一つのモデルを語ろうと試みる。

S2 「形は存在するものの中で唯一、常に色に随伴するものである（τοῦτο σχῆμα, ὁ μόνον τῶν ὄντων τυγχάνει χρώματι ἀεὶ ἐπόμενον）」（75b10-11）。

この試みは普通の意味での定義とは異なっている。類と種差とによる定義ではない。しかし、ここで二つの注目すべき点がある。形はあらゆる存在者のなかで唯一、かつ、常に色に随伴すると言われている。この条件に

6 本文中での、徳が一つのものによるというこの承認に至るまでの本文中の微妙な議論の詳細な分析はクラインを参照。op.cit., pp. 9-53.

より、形を存在者の中で確かに唯一のものとして同定可能なのである。このソクラテスの例示の試みをメノンは次のように言い換える。

M2 「形は常に色 (χρῶμα) に随伴するものである」(75c5)。

ソクラテスが色を表すのに χρῶμα という語を使ったのに対して、メノンは χρῶμα という語を使っている。この χρῶμα という語は色の他に肌、表面を意味する語である。肌の色と色とは殆ど同じこととして理解されていることを示している。そのことは図らずもソクラテスの使った形を言い表す言葉が正しいことをメノンが言外に承認していることを示しているのである。しかし、それにも拘わらず、メノンは「色とは何か」を知らないと言われたら何と答えるか (c4-7) とソクラテスに挑戦的な態度を示すのである。この挑戦に対してソクラテスは対話・ディアレクティケーの必須条件を二つ提示する。1) 「真なることを答える」、2) 「質問者が予め知っていると同意したことによって答える」、である (D2-7)。ここでは第二の条件が重要である。ソクラテスは形の「何であるか」を語るに色をもってしたわけである。そして、色は人が人としての条件を有する限りで誰でも知っているものである。したがって、メノンも色を知っているのである。そのことにより、ソクラテスの形とは何かという問いに対する回答は完結しているのである。それにも拘わらず、誰かが色を知っているとは言わない場合に、どのようにソクラテスが答えるか、とメノンが言うとき (75c5)、メノンは真に論争家的な態度をとっているのである。しかし、メノンのこの反論は単に論争家的であるだけではない。メノンはある専門的な方法を考えている。(1) 知られたもので、真であると承認されたものを通じて、(2) 疑い得ない結論にたどり着くという幾何学的方法である。ソクラテスはこれに次のような形で答える。メノンに従い、形についての生活世界に根ざした言語使用の意味を捨てるのである。メノンの挑戦に応じた形の第二定義は幾何学的なものである。ソクラテスは自らが提示したディアレクティケーの規定に従い、ホモロギア・同意から出発し、知られていないものを使う定義を避けようとする。τελευτή (終端), πέρας (限界) ἔσχατον (極限) は、名は多だが実体は一つである。徳と勇気、正義などのように、個別例を含む全体として一つなのではない。こうして、知られたものとして ἐπίπεδον (表面), στερεόν (立体) の存在が同意される。こ

れからメノンの反論に対応した形の第二の定義がなされる。

1.4 S3 「形は立体の限界である (στερεοῦ πέρασ σκῆμα εἶαι)」(76a7). この定義はユークリッドの形の定義 (Euclid Elements 14), “a figure is that which is contained by any boundary or boundaries (σχήμα ἐστὶ τὸ ὑπὸ τινος ἢ τινῶν ὁρῶν περιεχόμενον)” と微妙に違っている。この定義によれば、形は「囲まれた (包含された) 大きさ (contained magnitude)」であることを意味する。直と曲は含まれない。『メノン』におけるソクラテスの定義は線にしても面にしても、限界により限界づけられたものではなく、限界そのものである。この扱い方はユークリッドよりも抽象的で、思考上より厳密である。

メノンは、ソクラテスの幾何学的定義に反対しないので、暗々裡にソクラテスが務めを果たしたことを認めたことになる。そして、色とは何かと更に問う。本来はここでメノンは、ソクラテスによる形の第二の規定に倣って、徳の規定をおこなうべきであるが、それを避け、回答を引き延ばすのである。そして、形の第二の規定と同じように色の規定をソクラテスに求める。ソクラテスはこれに応じて、色の規定を行う。

S4 「色は視覚に調和し、知覚された形の流出である (color is an effluence of figures, commensurate with sight and sensible. ἔστιν γὰρ χροῶν ἀπορροή σχημάτων ὅψει σύμμετρος καὶ αἰσθητός)」(76d5).

この規定が大変よいとメノンは満足の意を表す (76d6)。ソクラテスはその理由を馴染んだ形で語られているためだと言う。メノンの眼鏡にかなったエンペドクレス流の色のこの規定は色を形により (色 = 表面 [= 形]) 規定するのである。この無意味さにメノンは気づいていない。メノンが想起しているのはゴルギアス風の大げさな言葉遣いであり、これに喜びを感じているのである。ソクラテスは、メノンが形の回答よりもこの色の規定に満足していると言う (76e3-4)。しかし、ここでソクラテスは一つの注目すべき発言をする。今与えられたこの回答よりも先の回答の方がよい、と言うのである (76e)。さらに、メノンが昨日言ったように秘儀前にアテネを發つのではなく、それが終わるまで滞在し秘儀に与ることができるならソクラテスと同じように考えるようになる、と言うのである。この言葉は、プラトンが意識的に二つの方法を対比させその違いの理解を読者

に求めていることを示唆していると考えられる。では、形に関する先の答えとは何を指しているのか。三つの可能性がある。最初のソクラテスの回答の可能性。メノンの求めに応じた二度目の回答の可能性。色の規定と対比された形に関する二つの答えを一緒に指す可能性である⁷。何を指し示しているかを明確にするために、それぞれの規定の特徴を見てみよう。形の規定と対比されている色の定義の問題点は、色を形により規定しようとすることにある。形が知られていない場合はこの規定は不完全である。ソクラテスが形の規定を行ったときにまさにメノンが色を知らない場合をあげて不満を示した点である。同じことをメノン自身が行っているのである。また、形による色の規定は、少しその表現を変えれば聴覚なども含めて、そのほかの感覚にも適用可能となり色に固有のものではない(76d9-e1)。そうした意味では形に関する二つの規定は色の定義の試みより優れている。しかし、最初のソクラテスによる形の規定が我々にとって既知である色を用いるのに対して、メノンの求めに応じて与えられた形の第二の規定は幾何学的な概念とはいえ立体というここでは未規定の概念を使っている。別の言い方をすれば幾何学的考察をする際に、真として規定された立体の(色や堅さを持たない)定義を前提としてそのまま使っているのである。幾何学が扱う立体や、平面にはそもそも色や堅さというものが初めからないのである。そもそも色や堅さのない形から形の一致ということにより、どのように色とその感覚を作り出すことができるのであろうか。従って、よりよいという言葉で指し示されているのはソクラテスによる最初の形の規定であると理解すべきである。

ここで三つの規定がどのような意図で導入されているか考えてみよう。

7 R. E. Allen は色の定義に対比して前者の二つと理解している (*The Dialogues of plato*, vol.1 (1984) comment, pp. 128-9)。ブラックは「立体の限界」という定義と取る。クラインは「形とは色に常に随伴するもの」とする。R. S. Bluck, *op.cit.*, p. 254; Jacob Klein, *op.cit.*, p. 70。

S2 「形は存在するものの中で唯一、常に色に随伴するものである。」	我々の生の現場に基づく規定。形と色の存在の同時性。形に種類あり、色にも種類あり。形と色の存在の同時性により、色のもつ性質が同時に形と関係ある可能性あり。
S3 「形は立体の限界である。」	幾何学的規定。色と堅さが不在。
S4 「色は視覚に調和し、知覚された形の流出である。」	色そのものの規定の不完全性。

ソクラテスによる形の最初の規定には重要な一つの特徴がある。色と形の必然的関係である。我々が生きている現実の世界では、色があるときは形があり、形があるときは色がある、という関係が常に成立している。そして、色を我々は知っているのである。我々はこの関係をソクラテスが徳の定義を試みる際のモデルとして提示していることの意味を考慮する必要がある。何らかの形で徳の規定を試みる際に役立つものとしてソクラテスは語るのである。どのようなヒントとなるのであろうか。それは冒頭の「徳は教えられたものか」という問いに関わる。ソクラテスはこれに対して、徳の「何であるか」が知られないときに「どのようにあるか」を知ることができない、と回答を避けた。同時に、メノンという人間を全く知らない場合の例を挙げた。ここで、この問いと形の最初の規定を比較する必要がある。メノンの「教えられたもの」という述語は、その問いをたてるときにどこからメノンの心に浮かんだものであろうか。その点をソクラテスは問うているのである。「徳」と「教えられたもの」という二つの観念を結びつける中項をソクラテスはメノンに考えるよう促しているのである⁸。そしてそのことを、形と色の関係をモデルとして類比的に、考えるよう示唆しているのである。徳が「教えられたもの」か、という問いは、対話篇

8 クラインは形と色の関係を *knowledge always accompanies excellence* ということのモデルとして導入しているのだと解釈している。 *op.cit.*, p. 60. 徳と知識の同時性の主張と理解する点では正しいが、形に徳が対応し、知識に色が対応していると考えべきであろう。また、よく知られたフレーゲの宵の明星と明けの明星という異なる意味を持つ言葉が金星という指示対象を共有することにより、言葉が語るのは異なる意味にも拘わらず、その同一性を語りうるという構造とある点で似た点がある。しかし、金星は「見えるもの」であるのに対して、徳と知識は見ることができない。真の困難はこうした見ることによりその同一性を確認し得ない、徳や知識のような存在の同一性とその関係の理解にあるのである。

のこの地点ではまだ登場することのない知識という中項を介して初めて成立しうる問いであることを、ソクラテスはメノンに想起するように促しているのである。即ち、形と色との関係は徳と知識の関係と類比的であり、知識が「教えられたもの」であるなら、徳も「教えられたもの」という性質を共有する可能性があるのである。この検討は後半の仮説の方法で実際に試みられる。更に、形を規定するこのモデルは次のことも示唆している。ソクラテスに特徴的な主張として「徳は知識である」という主張があげられることがある。しかし、その実体は必ずしも明確ではない。その主張を理解するための一つの示唆をこのモデルは与える。即ち、この主張は徳と知識との端的な同一性を主張するものではなく、徳と知識はそれぞれ別のものでありながら、それにも拘わらず、徳があるところには知識があり、知識があるところには徳がある、という主張として理解するならより首肯するに足る主張となるのである。こうして、徳がある場合には知識があり、知識がある場合には徳がある。すなわち、両者は外延を等しくする。また、徳にはその部分として正義や節制、勇気があり、知識にもその部分として幾何学、天文学、代数、などがある。それは形に直と曲、色に白や黒、黄色があるのと類比的である。そして、知識が「教えられたもの」なら徳も何らかの形で「教えられたもの」と言いうる可能性があることになる。こうして徳の規定を再度試みる準備が整えられた。ソクラテスはメノンに問うた最初の問いを再びメノンに迫り、メノンは再度徳とは何か、その規定に挑戦する。

2 探求と想起

2.1 メノンはシモニデスと思われる詩人の「美しいものを喜び、なし能うこと (χαίρειν τε καλοῖσι καὶ δύνασθαι)」(77b3) という言葉を引用する。そして、これを少し変更する。

M2 「(a) 美しいものを欲求し、(b) 手に入れることができること (ἐπιθυμοῦντα τῶν καλῶν δυνατὸν εἶναι πορίζεσθαι)」。

ソクラテスはすぐこの規定に対して修正を迫る。(1) 美しいものを欲求

するということは善を欲求することではないか⁹。そして、万人が善を望むのであり、悪を欲求する人はいないのではないか。したがって、(2) 徳の条件としてメノンの言う規定の前半 (a) は不要であり、(b) のみが徳の条件となるのではないか、と言うのである。これに対して、メノンは悪を欲求する人もいる、と主張する。ここから、78a6, 78b1-2で「誰も悪を望むものはいない (οὐκ ἄρα βούλεται τὰ κακὰ οὐδεὶς)」ということが確認されるまでの議論はそれ自身で詳細な検討を要する。ソクラテスの思索の根幹に関わる事柄が考察されているからである。しかし、今はその結論だけを確認して今までの考察に関連することのみを取り上げたい。

2.2 善きものを健康や金銀などの富、名誉以外にはないとするメノン (78d) にソクラテスはこれらの獲得に際して、正義や節制、敬虔など他の徳が必要なのではないかと問い、メノンはこれを承認する (78e)。すると、徳が徳であるためにはこれら善きものを獲得する能力としての徳以外に正義などの徳の部分を必要とするという循環に陥る。すなわち、すべての行為は、徳の部分を伴うときに徳であることになる (79c7-8)。ここでソクラテスは新たに S1 とは異なる別の知識の構造をメノンに提示する。

S5 「徳を知らずして、徳の部分が何であるかを知ることができるか」 (79c8-9)。

これは S1 「「何であるか」が知られないときに「どのようにあるか」を知ることとはできない」という知の秩序とは別の知の秩序である。このテーゼの意味するところは「部分を知ることと、その部分の全体を知ることとは同じことである」ということである¹⁰。そして、ソクラテスはメノンのように答えることは求められている問いに、知られていないものにより答えるのと同じである、となす。その際に、形に関するソクラテスの回答

9 この部分は『饗宴』のエロースが美への欲求とされながらも、最終的には善へのエロースと修正されることと揆を一にしている。この箇所の議論が、ソクラテスの基本的な主張である「誰も悪を望むものはいない」ことを確認する場面であることに関係する。

10 本質の知と部分の知（あるいは具体例）の相互性に関わるこの主張は時に Socratic Fallacy と Geach により命名され論じられたことはよく知られている。P. T. Geach, "Plato's *Euthyphro*: An Analysis and Commentary," *Monist*, No. 50 (1966), pp. 369-382. 我々はここで存在者の同定と述定との問題が別であり、その両方が『メノン』で問題となっていることを確認することができる。

に言及し、メノンがこれを想起するように促す。この言及は冒頭からの問いが一貫して問われていることを意図的に示している。そして、改めてメノンあるいはその友人が徳を何であると言うのかと、と問うのである。その際に、メノンはソクラテスをシビレエイに喩える。よく知られた箇所である。同時にメノンは対話篇中である意味では最大のアポリアを提出する。これは「探求のアポリア」と呼ばれている。

M3 「その何であるかを全然知らないものをどのような方法で探求するのか。知らないことのうちのどのようなものを指定し探求するのか。幸運に射当てたとして、どうして、それが知らなかったものであると知ることができるか」(80d5-8)。

これをソクラテスは論争家的な議論と呼び、次のように言い換える。

S6 「人間は知っていることも、知らないことも探求できない。知っているのだから、知っているものを探求できない。探求すべきものを知らないのだから知らないものを探求することはできない」(80e1-5)。

これはメノンのソクラテスに対する真の挑戦である。対話篇冒頭のメノンによる意図的な問いに対して、ソクラテスはS1によりカウンターパンチとも言うべき、メノンが予期しない打撃をメノンに与えた。今度はメノンが、ソクラテスの徳の探求の要求に対してソクラテスが用いたその同じ論理で反論しようとするのである。この反撃は通常「探求のパラドックス」と呼ばれている。そして、これは形の上では、徳の「何であるか」という探求に対するアポリアとして提示されている。確かにそれはテキスト上ではその通りである。しかし、このパラドックスが目指す射程はもっと広範囲に及ぶものである。そのことを次に確認しよう。そのためには、このパラドックスが登場する文脈を見る必要がある。

2.3 この箇所の直前でソクラテスは、メノンの「人は悪も善も同じように欲求する」という主張に対して、「人が悪を望むことはない」ことを論証した(78a6, 78b1-2)。すなわち、人は一義的に善を欲求する、とソクラテスは主張するのである。これはメノンの徳の規定であるM2の前半の条件(a)「美しいものを欲求し」という部分を無意味な主張となす。すると、人が皆例外なく善を求める以上、何らかの形で善を知らなければならぬ。知らないものを求めることはできないからである。また、求めるも

のを手にしても、善を知らないなら、それが求めた善であるとどのように確認できるか、という問題が生じる。人は一義的に善を求める、というソクラテスの主張自体が意味を持つ条件をメノンは問うているのである。さらにまた、善を求める人がすでに善を知っているなら、それは何らかの形ですでに存在しており、そうした意味で求める必要はないのである¹¹。さらにもう一つの大きな問題が生じる。人が一義的に善を欲求し追求するのなら、人は何故悪を為すのか、という問題である。これは言うまでもなくアクラシアの問題に繋がる。探求のアポリアは理論的探求のもつアポリアという以前に、実は我々の行為の構造そのものが持つ問題性に根ざしたアポリアなのである。

このアポリアに対してソクラテスは問題を解く鍵として想起説を語り始める。人間の魂は不死であり、何度も生まれ変わり、此の地と彼の黄泉の国にある全てのものを既に見ており、学んでいないものはない、学ぶことは全体として想起である、というのである(81cd)。そして、想起の具体例として、奴隷少年とソクラテスとの間で展開される、よく知られた所与の正方形の面積を二倍化する方法の発見が語られる。次の課題は、想起の具体例として提示された正方形の面積の二倍化モデルは何を意味しているのか、という問題である。

3 幾何学の方法と仮設

3.1 議論を始めるにあたって、ソクラテスは少年がギリシア人でありギリシア語を話すことを確認する(82b4)。これはギリシア人であること、ギリシア語が話せることが問題とされているのではない。言葉で話し合うことができるか、ディアレクティケーが可能かを確認しているのである。次に、正方形の二倍化の問題とは何を意味しているのかを考察しよう。

11 これはおそらく「徳は教えられたものか」という冒頭のメノンの問いと類比的な構造を持つ。徳がすでに存在し、それが教えられたものとして存在しているなら、それを探求する必然性はないのである。徳を手に入れる確実な方法は端的に教えてくれる人に教授を乞いさえすればよいのである。

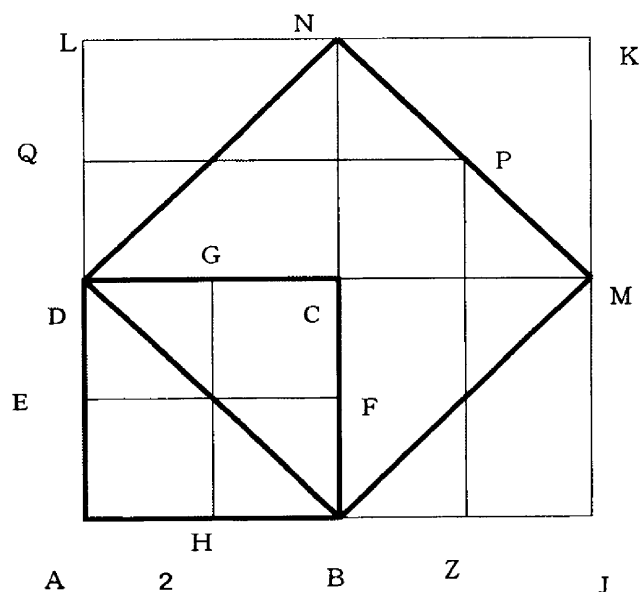


図 I

一辺 (AB) が 2 プースの正方形の面積を二倍にすることが少年に課せられた課題である。所与の正方形の面積は 4 平方プースである。少年は、最初に二倍化するということから、求められている正方形の辺を二倍の長さとなす。すると面積は四倍の 16 平方プースとなる。その指摘に 4 と 2 の中間である、3 プースとする。この場合も 9 平方プースとなり大きすぎる。結果的には所与の正方形の対角線 DB を一辺とする正方形が求められている二倍の面積 8 平方プースである正方形となる。この二倍化を巡る議論はよく知られているので、詳説する必要はない。問題はこの所与の正方形の二倍化という課題とその解決がここで想起の例として語られることの意味は何か、ということである。従来はこの箇所をただ想起の具体例としてのみ取り上げてきた。したがって、ここで展開される議論は、少年が、ソクラテスが想起と呼ぶ過程を経て所与の正方形の二倍化という今まで教わったことのない幾何学的方法あるいは真理を発見するというものである。しかし、ここで提示される具体例は単に与えられた正方形の面積の二倍化の方法に関する想起に尽きるものではない。ここでプラトンは数学の基本性格とその方法を提示しているのである。その意味は次のように理解できる。

3.2 まず、ここでは二つの正方形 ABCD と正方形 BMND の間に存する

必然的關係が問題となっている。想起の具体例とされることから、すなわち、所与の正方形 ABCD の対角線が求められた正方形の一辺を構成するということの発見は、正方形の何であるかという本質あるいは定義により決まっていることである。正方形の何であるかが知られているときに、二つの正方形 ABCD と BMND についてどのようなことが語りうるだろうか。この場合は形においては相似形、その面積（量）においては二倍という關係が必然的に成立するということである。少年は幾何学を学んだことはない。その少年が正しい結論に至るのは、何によるのであろうか。正方形の定義を知っているとは考えられない。すなわち、正方形の何であるかの知識を持っているという意味で知っているわけではない。しかし、少なくとも足下に描かれた正方形を正方形として認識することはできる。正方形を正方形として同定ができるのである。そのことにより、ソクラテスとの対話を通じて正方形の何であるかの想起に順次至ることを示している。そして、正方形の何であるかの想起とそれがどのようにあるか、ということの想起は相携えて成立すると考えられる。S1 の「何であるかが知られないときにどのようにあるかを知ることはできない」と S5 の「徳を知らずして、徳の部分が何であるかを知ることはできない」と密接に結びついていることが分かる。部分はある意味ではその具体例だからである。二つの正方形 ABCD と BMND が相似形であると認識することは同時に二つの正方形を一つの正方形として認識することでもある。また、学ぶということが全体として想起であるという主張が探求のアポリアに対する回答として提示されていることも理解可能となる。

次に、求められた二倍化が可能となるのは正方形の対角線の発見による。対角線の発見は同時に無理数というものの存在の発見でもある。無理数の発見は何を意味するのであろうか。それにより正方形の二倍化のみならず、三倍化、五倍化、N 倍化が可能になるということである。 $\sqrt{2}$ や $\sqrt{3}$ のみならず \sqrt{n} の作図が原理的に可能であれば、このことは可能となる。さらにそのことは何を意味するのであろうか。任意の正方形を単位としてその N 倍化が可能となり、それらを（幾何学的量としてではなく）数学的に（算術的量として）扱うことができることになるのである（おそらくすべての量を、すなわち、線分、平面、立方体を別々の次数を為すものとしてでは

つ点 G 上で円に内接する垂線の長さである線分 FG として与えられる。プラトンはこうした任意の無理数の作図についてどのように考えていたであろうか。次に、その点を『メノン』の中に登場する第二の幾何学的議論を手がかりに考えてみる。

3.3 第二の幾何学的考察は仮設の方法の場面で登場する。探求のアポリアに対して想起という事柄を提示したあとでソクラテスはメノンに当初の課題である、徳の「何であるか」を共に探求し、想起するように求める。これに対してメノンは頑に最初の三つの選択肢、徳が教えられたものか、習熟によるのか、生まれつきの素質によるか、を探求しようと主張する。そこでソクラテスは、徳の「何であるか」が先に探求されるべきことを再説しつつも、やむを得ずに仮設の方法によりメノンの求めに応じて、徳が教えられたものか否かを考察することとなる。ここで幾何学の方法とその具体例が再度登場する。この部分はステファヌス版テキストで僅か6行でしかない。非常に簡潔に語られており、そこで語られている具体的な作図がどのようなものかを示すことは大変困難である。その解釈の試みは数十に及んでいる¹⁴。今はここに語られている具体的な図形の解釈の詳論を避け、その導入の意味を『メノン』篇全体の議論との関連で取り上げたい。この部分を便宜的に次のように分節する。

1. 幾何学者に図形について次のように問うた場合、「この図形を〔同面積の〕三角形としてこの円に内接させることは可能であるか」(86e6-87a1).
2. 幾何学者は答える、「この図形がそのような性質を持つか未だ分からない。このような事柄にはある仮設が役に立つように思われる」(86a1-3).
3. 1 「与えられた〔その〕辺の線分に沿ってのびたその図形 (τοῦτο τὸ χωρίον) が延長した分だけ欠いている場合一つのことが帰結するように思われる」(86a3-6).
- 3.2 「そのようなあり方が不可能なら別のことが帰結する」(86a6-7).

14 ブラック, *op.cit.*, Appendix, pp.441 以下参照.

4. 「仮説を立てて、その図形の円への内接が可能か否かその帰結を私は語りたい」(87a7-b2).
5. 「徳についてもそのように」(87b2).

最初の分節では(1)特定の平面図形を(2)同面積の三角形に変形して所与の(3)円に内接可能か否か、を問うものと考えられる。この場合に(1)の平面図形がどのような平面図形かが問題となる。この図形を最初の幾何学的場面で登場する二倍化された正方形とする。(図ⅡのABCD)次の(2)は三角形と指定されているから問題はない。少なくともこの正方形と三角形は同面積であることが条件となっているとすることができる。そうでなければ、与えられた平面図形と三角形は何の関係もない二つの独立したものとなり、円への内接を問うことに意味がないであろう。第三段落3.1では実質的な仮定が為される。無理数として与えられた正方形の一辺を延長し、その延長線分を新たに変形して作図される三角形の底辺とする。したがって図Ⅱの三角形BEDと考えられる。すると二倍化された正方形の一辺を垂線(DC)としてその反対側に同じ形の三角形が成立する(三角形CED)。その三角形は二倍化されたもとの正方形の面積の半分であるから、延長線上に新たに作られた三角形(三角形CED)ともとの正方形の半分(三角形BCD)は等しいことになる。「延長(αὐτὸ παρατεταμένον)」を欠くという表現はこのことを指していると考えられる。このように理解すると実質的にA. Beneckeの解釈¹⁵と同じことになる。このように理解した上で、この仮説が対話篇全体の議論にどのような光を投げかけるのかを考察してみよう。

3.4 まず、最初に気づくのは正方形、三角形、当該の三角形の円への内接という三つの事柄が関連するものとして語られている。これは最後の5段落で徳の考察のための具体的例示とされているので、今考察している徳の問題に何らかの対応関係がなければならない。さらに、この対比に対話

15 ブラック、*op.cit.*, Appendix, pp.447-8 以下参照。円の描画については直接に言及されていないが、同じ箇所のコメントが言及しているにシュルツが指摘するように74d-eで直と曲についてソクラテスが述べる際に、所与の正方形に適用していると考えれば、理解可能となる。

篇の最初の部分で徳を定義するモデルとして提示された形と色の例を対応させてみる。すると次のような対応関係を見ることができる。

正方形	(=同面積=)	三角形	——	三角形の持つ性質としての円への内接(どのようにあるか)
徳	(外延を等しくする)	知識	——	教えられたもの
形	(外延を等しくする)	色	——	色の持つ属性

形は常に色に随伴するとされた。その意味で、言わば、両者はその存在の外延を等しくする。徳と知識との関係も同じようなものと仮定するというのである。同じような関係、すなわち、正方形と三角形は徳と知識と同じようにそれぞれ異なるものだが、それが同面積で、しかもある条件を満たすときに形を変えられた図形は、すなわち、もとの正方形と同面積の三角形は円と内接するという性質を持つ、というのである。ここでの要点はもとの正方形と同面積の三角形(おそらく正方形の一辺を共有する)がある条件を満たすなら、円に内接するという性質を同じように必然的に持つ、ということである¹⁶。同様に、徳に関してある仮設を設定する。徳を知識と(等しいと)仮定するのである。徳と知識の間に、正方形と三角形の面積を等しくするという条件を設定したように、この関係を適用し、知識が特定の属性を持つなら、その存在の外延を等しくする徳も何らかの形で知識の属性を共有するというのである¹⁷。この仮設の結果、知識のもつ属性として「教えられたもの」という性質が疑う余地のないこととして承認される。すると、メノンがあれほど答えを求めた徳は教えられたものかどうか、という問いは簡単に答えられることになる。徳が知識なら、知識は存

16 仮設の例として提出されている三角形の円への内接という属性をここで持ち出す意味について、さらに次のような想定をすることも可能であると考えられる。当初の幾何学的場面の要点は正方形の面積の二倍化は対角線という形で示される無理数の存在の発見に依存していた。その底辺を半円の直径と同じくし、その半円に内接する三角形は直角三角形である。そして、半円に直角において内接する三角形の内接点から直径におろした垂線は、その垂線が分かつ直径の片方の長さを単位として設定すると、残りの直径の割合の無理数を形成する。したがって、この箇所は最初の幾何学的部分で要点となる任意の無理数の抽出法を語っている可能性がある。

17 正方形が、三角形が内接する同じ円に、また、内接するとは言い得ないかも知れない。しかし、元の正方形の二倍の面積を持つ正方形は同じ円に内接する。

在するもののなかでとりわけ教えられたものという特性を持つから、徳も教えられたものと答えることが可能となるのである。

こうして対話篇冒頭の問題は一見すると落ち着いたかのように見える。しかし、実はここからソクラテスの吟味、すなわち、数学の方法とは異なる哲学の吟味が始まるのである。徳が教えられたものなら、徳を学ぶ人とそれを教える徳の教師がいるはずである、と言うのである。そして、結果的には徳の教師が存在しない、とソクラテスは言う。すると徳の教師の不在の確認と同時に徳が知識であることと、教えられたものであることが否定されることになる。そこで新たに徳の候補として真判断 ($\alpha\lambda\eta\theta\eta\varsigma\ \delta\acute{o}\xi\alpha$) が登場する。真判断は知識に劣らず行為に於いて有用で善きものをもたらすという理由による (98b)。こうして、長い議論の果てに徳が知識であることが否定され、真判断の可能性が示唆される。それは、言はば、神懸かりのように人に与えられるのだという形で対話篇は終わることになる。これが、徳が教えられたものか否かという問いに対して、対話篇が与えた結末であるかのような印象を読む人にあたえる。しかし、対話篇の表面ではなく、よくよく全体の議論の構造そのものを考えると、そこには全く別の姿が浮かび上がってくる。最後に、そのことを確認しよう。

3.5 対話篇終わりの言葉としてソクラテスは「徳がどのように人に備わるか」ということより、「徳が何か」を知ることが先にあり、それが知られたときに備わる仕方も分かる、と再度その原則的主張を繰り返す。そのことは、結論のように見えるこの結末が実は結論でないことを明確に示している。それは何であろうか。実は徳である可能性を持つものとして仮定された知識に関してこの原則を議論の過程で無視した結果、この結末に至り着いているからである。それはどの場面かといえば、徳に関する仮設の場面である。そこでは知識が教えられたものであることを無条件に容認し、その前提のもとで知識と徳との同一性を問題とした。しかし、S1 「何であるか」が知られないときに「どのようにあるか」を知ることができない」というソクラテスの原則をこの知識についても、徳と同様に、適用しなければならなかったのである。すなわち、知識の何であるかを知らないうちは、それが教えられたものか否かを我々は原理的に知り得ないのである。その点を問うことなしに、メノンとソクラテスは、知識は教えられた

ものであることを無条件に容認した。ここに問題があったのである。その結果、徳の教師が存在しないので、徳は知識でないことになった。しかし、知識が教えられたものではないなら、つまり、この仮設が間違っているなら、知識が徳であること、あるいは、徳が知識であることの可能性は残るのである。徳の教師がいなくとも徳を学ぶことはできないのであろうか。徳の教師がいなくとも人は徳を学ぶことはできるのではないのか。徳、あるいは、知識を教えられたものと想定したその想定が問題なのではないのか。人が徳を学び、知識を学ぶということは教師と称する人に教えてもらうことではなく、むしろ、自ら想起すべきことなのではなかろうか。学ぶということは全体として想起だ、という主張はそういう意味で語られているのであり、その意味を理解するならば、徳の教師の不在は徳が知識であることの不可能性を帰結するものではない。それが対話篇全体の意図ではなかろうか。

もう一つの結論は、対話篇全体を通じて数学の方法と哲学の方法とが明らかに意図的に対比されているということである。それは仮設の場面で特に明らかである。幾何学の場合は正方形や三角形、円の何であるかが定義あるいは同意により与えられている¹⁸。その何であるかを仮定して、無条件に真理とするのである。そして、ある特定の条件を満たせば、つまり仮設の方法のような場面があれば当該の三角形が円に内接するという属性をもつことが必然的に結論として導出可能である。そして、おそらくそれとは逆の意味である条件を充たす三角形が半円に内接するならば別の帰結、すなわち、任意の無理数の抽出が可能となるのである。仮設の方法の箇所3.2の段落「そのようなあり方が不可能なら別のことが帰結する」(86a6-7)という言葉は、直接には当該三角形の円への内接の否定を意味するように見られるが、間接的にはこのような状況を示唆する可能性がある。所与の条件が異なれば帰結も異なることを一般的に述べているからである。このばあいを考えれば、前提からの帰結としての三角形の内接の可否が問われているのではなく、内接が所与としてあり、図II 三角形 BEF の頂点 F が円に内接してはいるが、三角形 BGF と線分に沿って作図され

18 数学の特徴は予め同意されたことを通じて探求するという点である。『メノン』79d3。

た三角形 GEF の面積が $1:1$ ではなく $1:a$ の比をなすばあいである。すなわち、線分 BG を（長さの）単位となして、それに対して a という長さをもつ線分 CE を加えた線分 BE ($=1+a$) を直径とする円に、その同じ線分 BE を底辺とする三角形の頂点 F が円に内接するばあい、F から底辺 BE におろした垂線 FG の長さは常に \sqrt{a} となる。したがって仮設の方法の議論は、奴隷少年との間で示された正方形の二倍化の具体例を普遍化し、 N 倍化を原理的に可能となす無理数の普遍的な抽出方法の例示として、ある条件下での三角形の円への内接という帰結の導出と同時に例示されている可能性がある。上に記したようにデカルトが普遍数学を構想した端緒となる事柄である。しかしながら、哲学はそういう方法をとることができない。知識を教えられたものと仮定したが、その仮定そのものを真とするのではなく、吟味することが哲学の方法なのである。学ぶということは想起であるという主張はそうした背景で語られている。教師の存在しないところでも、我々は自ら学ぶことができるのである。メノンが「徳は教えられたものか」と問うたときに、ソクラテスはその想定の後にある隠れた仮定（予断）を想起するようにメノンに促し、更に、知識に関するその仮定を吟味し、誤ったその予断を廃棄することを求めているのである。そのときに初めてメノンは真の意味での想起を始めるのである。それをプラトンは哲学と言っているように思われる。『国家』の線分の比喩でディアレクティケーと数学を対比させたときに意図されていたその違いを『メノン』は具体的に明らかにしていると考えられる¹⁹。

19 このように『国家』における数学とディアレクティケーとの対比が『メノン』で意図されていると主張することは『メノン』が『国家』より後に書かれた対話篇である、という主張をするものではない。先に『メノン』で基本的にその違いを確認した両者の方法的な差異を『国家』において定式化している、と考えることは可能である。